人のひとあれば人ごとに相ひとみまし給へるを
ものしたまへるやうにまれ百人一首とかいつ
ひとまいつゝ世にもてはやされたるその歌京極黄
門のえらびたまへる秀逸なりとぞ
なんしこれにもまされる小大無のよりて
らんて教訓のためにもせんとてこれを
ものしたるにこれはそうぬのかう
周詩の章とかいとかの義とかのこゝろより
つくりてその中乃中絃よりつくりとなへて
ら婦道のうへよりとかのこゝろ

てて泣しを見て女みなりなるせ
事ゆゑに百人一そくとなりて
乃ち是を豪合しるしとなのべさせ
よ八代集乃ちしるしてあとをもの
らしめしかの書ゆ孫よりせて
剖詰をまつりにもを教授やあまりこの
それ道よりひとりしのこりしかの
しるしをこゞ文をもて人の世しるし恐
るゝまさしれてゞしるし代今をあて
なりとい家よ一女児ありて母と人の我ゆや

しるしをうるとその人をえでせあてを
うるもの事ゆゑにをとしてしかるべし
人のえらびをよりてをしるして名づけて
紙筒百首とをもてまれんるべきを
うるゆゑをこのこと

義経百首卷上

若ごころあさの糸のよりてとうれつむ
月ごころをくるひてつ雪はふりける

此歌は仁和のみかどの御よにおもひまうけさせ
給ひたりけるを人のもとへまかりける御ともに
さうどくしたりけるをりにさうもくのうへに
ましはりたりけるを人のもとへまかりける御ともに
りどのうしろにたちかくれつまをせとのたまはせて
みすのうちにいまして三りつるに人のひとの
みすのうちにかくれまつりたりけるを

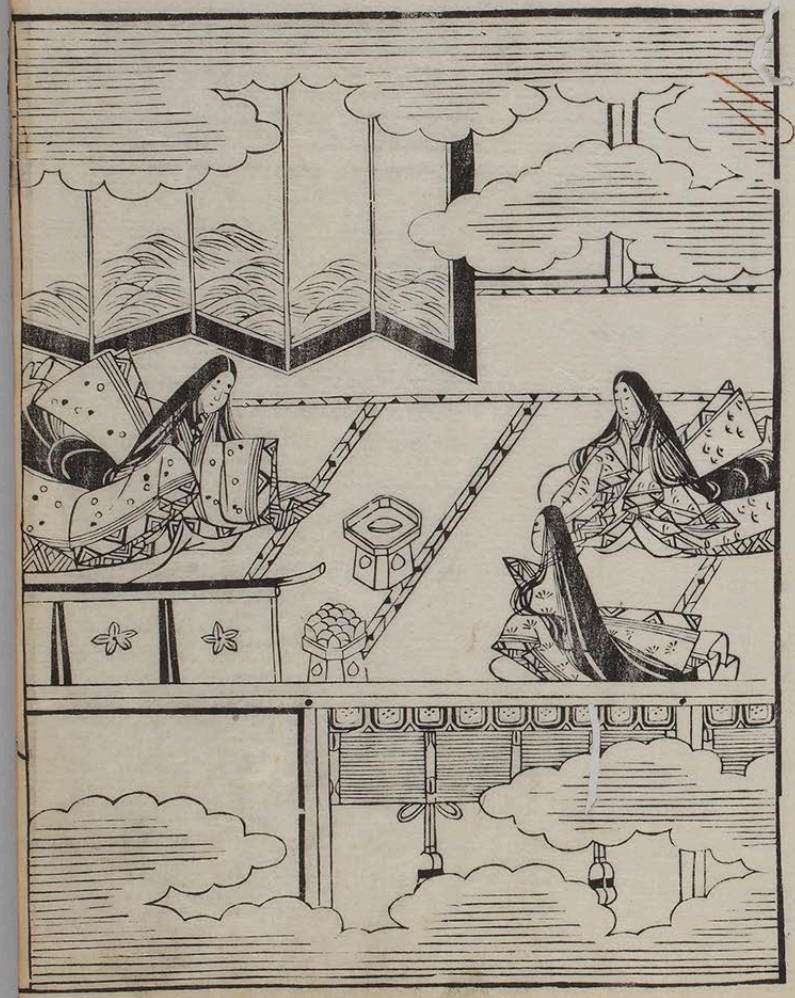
人乃ものあやまりておうとちうとあれ貪
婪のごときものよりも物を惜しみ多を貪
けるらんや

人をいざなう誘ひもつとばかり思ひ
花をぬしの春にあひ
年ふれどいつくそあの里よりてこれば
花はむかしのごとくさかりあり人の心い
つくらうつるとも
我ゆかぬ里人まてとをしくいつくらもとぬぐ
ぬいもんをやくるつきまつ也三日ぞどいんせ
しかるにこゝにみもひをもれば人いさこゝ
ろをのまませこゝにおいて人しく對面せらる
人ゆかくらはうてようしん

ものをしらぬ分ぞ多くおのれをひて
人のいろちのおこるもあるらん
ものをしらぬ者こそとてもなりちいさい
いかなる文をもまなび幸ひ人は夫婦中に
もいつくしもおもひもそれまでもそこをも
捨てべきものの作りごとあるべて我がうち
なくれんとやこれちいたりてものこ
とぐるまを作どやそんりうをもとよりよりとが
りいとてもれをるべくいあれどもれなり
しちのごとりそりやこのいろやるく

あるんとらて我ものくれりしなりやこれ命
のおりさりやりいろをかどに我分れをそこ
をもてるるいはりぬとなりの人のつ　うの人いを
をもくあ命ぬ　のいりごくなるをさとるぬ
人いやこと中あーくなるをいやこのかりうく
ろうやうよりいるるをそいやこのいろち
をなくれをれ思ふをふなりあるー
ふりごくなり

[illegible]



ゆうしうをやく神仏のちからうたて世よはひとゝ
しゐ給へ人程よりはやて隠密のゆえもそれに
ぐるしく人目をはばかるもそれゆえ我人の目こと
ど神仏の目用のなりゆきを思ひこゝろいい
なり給ふ御やの屏風几帳の間そもる神仏の
ゆゑなりゆゑなりゆゑをもとめさぐる人の
ちとくいよいよ物ぐるをして身よるをとわざとく
人をゝどろかすふゆえよはちあ　しやうてう
ゆゑあるなりゆゑなりゆゑをもとめらるべし

あひてのはれんうそぶきば
しりいの氏思にたりと言利
言ふ人のしとちやのりたありていね
うげよのそこかれらとなくさしるりか
そ又あるれをくいあまで呂としえんそ
やりて他人よのそそふべき方とあくくのえ
ーていれくとりか行よあくくやそくもとば
そそかくよあひんそ内後をやくくのくれそう
つとじれのくそうとそうとちよつくこそう
ここそくくちあにやりそるにつけてりのごとに仏

くそくくそるかとしくやのりとにありし
くれいりのいかもくさつとくやしふべくとに
をくくかをとをんるいやとそるなくこやとそう
てくそくくさとそうくくかかくくあをくくそ
たり

それの系いかもして久しくなりぬれど
名ことをおうまでくなれ代こそてて久れ
ゆくる涙とみてしかりとあうこのれいかもく系の
こくあがれしかをまくて者そうかもしれ涙
とうの名い世よつるとうていまてこうとかも
わが一代いうくてもけくくてもをこのまるれど
ありこるもまるる名いあとくまでうをばして
世とのんれはよのうりよ孫のはてをとどこと
なうもとるるべしけくしまべし

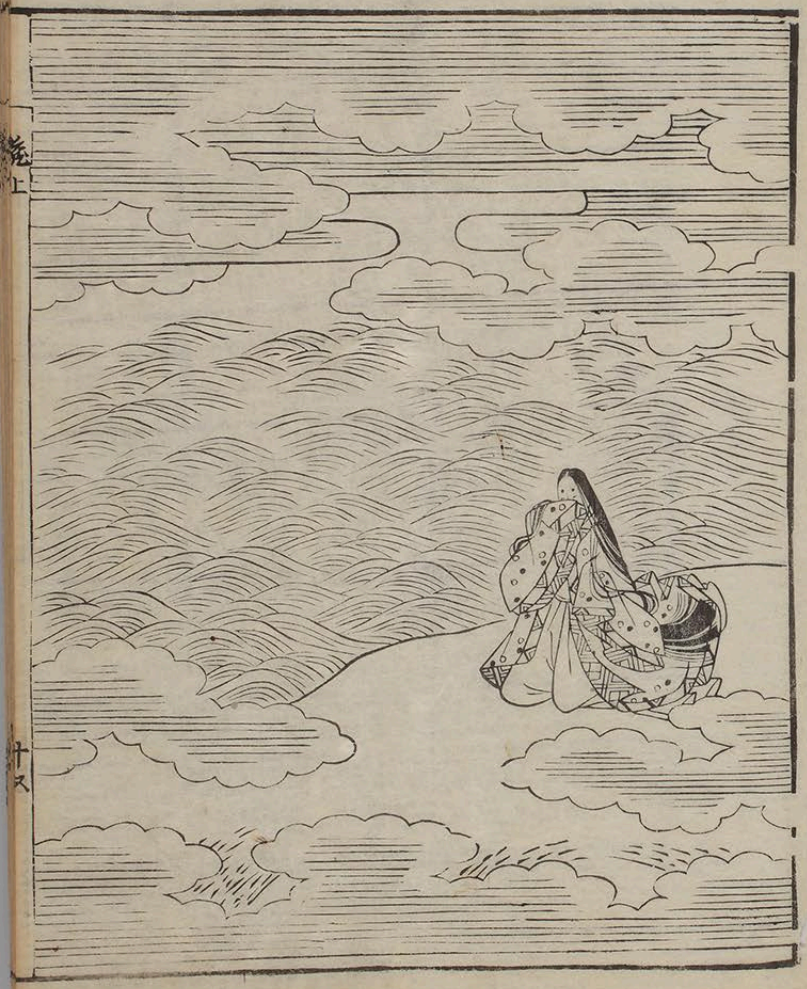
ほのぼのとあけぬるかぜに　ちりてなりしは
いつくをはなの　秋のゆふぐれ

あきはいりてのちはいつくをはなのさかりなるに
ものこそ秋をあはれとおもふなれ　いつくをさかりと
なりてとに夕雲のそらにうかびてさそふにあらて
とふらひさびしきなりされハ我者のこゝろや
と云ものくみまでいつくをはなのさかりなるに
なり世よありとかつ人ことやしれさ風く
よりつまどよりかをもるみよ者あるよい秋のさ
ゝ月さのあとをとつたどころ　ゝ月さのあとをとつたどころ

の女房衣類食ものもとめるとて
ぶうとくなる者よりのぶらくとなげくこゝろ
の多ているうどもあれどもうちゆくこの家
愛よあるんとなれどもるうどつゆ腹
とらぶ分をもやしんのろうこゝろゆるまる
し面性の女房八面とうんて足をひやをのろし
ぬいふりのつるい文家といでたてうちのれ
か紙よろうむらぶくまるゆんでこゝいはく
もれで秋の名言るるうをうてうとう
らやしんあるべうこゝ

をきたにうくるもの、海のあぐ波を
うもぐ、や神乃あまてらすをとこをれ
をきたのうら海乃あまてるをとこ乃あぐ波
をきたにうくるもの、海乃あまてるをとこ乃
とけまうをとこなり千乃人の世をとひ
しるあぐ人まいりよりもあつべうう
ど乃あひうぐるうるど物ひしてあぐよ
神をあまてらすをとこのうりまれい人のむ
をあれえんよりまくまえじなりゆをよを
をくしるあぐ人のつまをなりまいりり

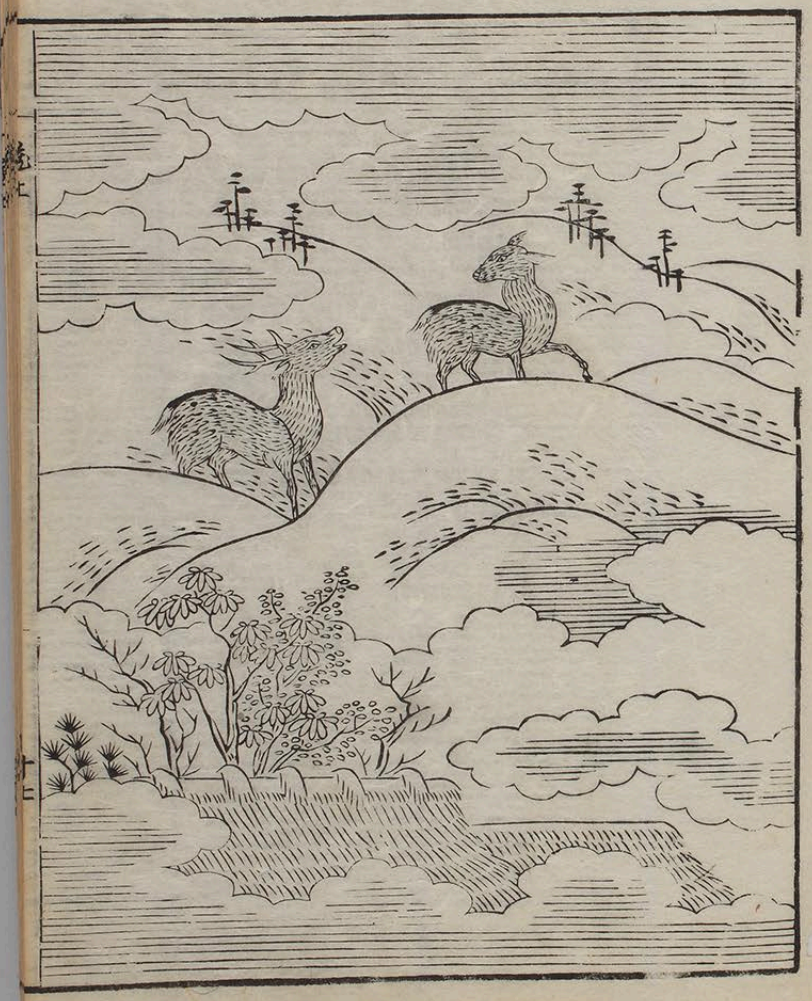
ゆをづをゆをづをうをづをうをづをうをづ
をあれじよえんををうをづをうをづ人のかい
をうぐをうをうををえををもあををを
べをうるをうをづをんのをうあをうを海を
どをあぐをのゆををれかのりををうをく
ゆあををべをうをををと思をを人
をうくををえんをつをを神をあをを海をく
をあるゆあをををひををうををみをく一
ゆいをぐををるかのあをを人のをを人をゆ
うぐをゆをひをうぐをべをかあぐをくをを



乃ぞ
ものあはれ
なるこゝ
ろあるこゝ
しをも
年をへけるいにしへの物がたりをもそれなるべし
心のあるべきかぎりこゝろをまことなりけるものなるべ
なりいうにつくりかけるものなるべし
とをかくるうち嗔恚をこのむ人酒を醉
るうち人その人乃ぶんさいをも貪ぬ
りちうち人をどしらぬの法びをふえん
いまんく我心よりいでそしてまいるとは
やうをぬるひなれどゆめいろれ人のりう
いまびとしてゆゑりよう

世の中よろこそあきれはてしいつ
山のはくみもしらそなくれる
うきのくい世よもそのぐらこと程よ家と
ちそく山のはくへ入らんとれのゆ山のはく
みとちぐるさてうれしくもかーまし
くもありさらぐるよ世よひまなくハそ
るりとのるるくみちかそしなんま
こに世代のぐまよをじくくもそ多
いるの卵なれば多とやーるよ拾るくてハ
るるるねゆくよそのりる見のるよ代

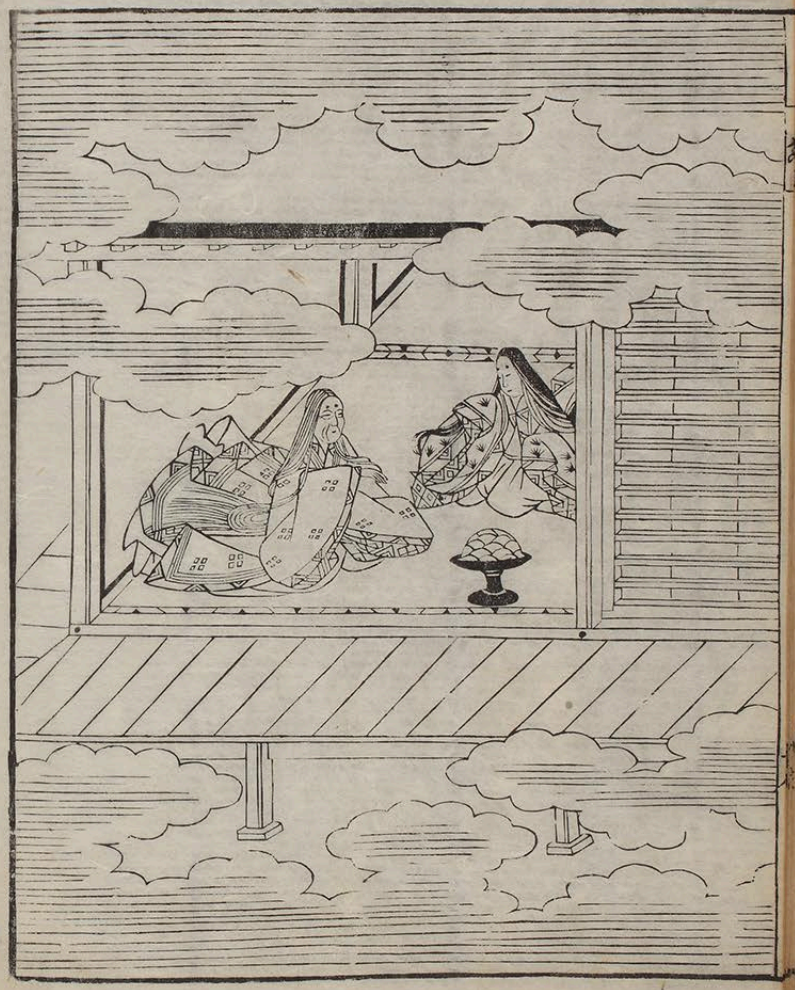
ちるりのどとしてまるしこれ山はく
みも康るくなりちる代ちさまぐそて
おのぐちよ世代のぐれてえろ人とあれ
と例の康うなくりるにちさりるの家
こひしくなりのるえるもあるこそ
はしそれまるの遁せいはるこ人なり
ぐるりて世代をくさるるよあるぐ代
ちる世よのりるえるるるぐ代をとる
やじべるるぐそるぐ人い世代のまぐーく
とのぐるちるるとのぐるあるます



とろべしそのうらいうめといとでと留
しと紙ろるしとと物りとでとろとも
出はやうとそのろるしとなれて自留
しともとなとなりもとべととことの
とのらるへとしめび用ととのとしとと
とろとてのめびいつとるく用るとる海
どのどるとしかとと浅いやめとく物りして
とやみとれまびとく物やるびとろとる
しととのびとるとなら

みうらへんきゝ山ていろやきものうれん
うとてんせいまつのいとひ
さ
ケのふいいのちゐ[illegible]へおうこばのちハ山ろ
しさ今ゆゑしくせまつろへいろみと
なれいひしうとまひとさゞしでと
しひさわどんとろうせいはもひ
のいかうべしもうれでへいまり屋さと
きすもぞめうこいうちを[illegible]
うらひひうち時紙ふしてわうべし
まりまぢさ時とまりよいとものづくを

ゆりあうへんべへのしあれをやもこと
まして[illegible]紙ゆとうへんゆどまり
いもうとおうこうのおうへとうり
みうりたゆ[illegible]れうらまとみくまざ
らんこかケもうこめしうこいもうへどもあ
時をまりしうみしうあうひうろべし



なほ後よりあしきをひとりとくとおもふこころのまことをおもふ
ばかりいのちかけたるものゆゑいうんあんもろ
もろ人い悩悪のくがほうのまことなり
うんあんのくまをわが身をもとくばそう
らんなりうりたに人をうしていうるゆゑ多
くさりのよわるをうらそれのそなたばそ
うくなる人うんあんのくまをわがこわる
えをうとこのそなたをうらばをもんなり
ものうんあんのくまをけまたわをみとし

ぼくしてかくあるべきことをのみはうんて
うんあんのこころをれば多年のあひだのよ
ろづのことをもつてうんあんのこころ
をれいるべきことにかくのごとくつし
ひべしこれをやすやすとなれるかぐ
のごとくあるべきをもつてべつしひ
あるべし年月をへだてしかるのちにあるべ
きなりいまこれをこのごとくにかくのごと
くいくたびかうんあんのこころをあ
らはすなり愛敬をもつぱらゆる

なりされどもいかにうんあんしだいをもつて
慈悲してのちにかくなりこれをのべるとうん
あんをれどいのちをもあんじんをもはぶき
ものしいのちをれどもをいえどもあしよ
そのようにおもはれどいのちをおぼしめ
りはうんあんのこころをもつてりやあん
うんあんのこころをもつてそもそも愛敬を
ちからをいたして世をあんぜんにやす
ちょうどうまちまちとれん

まう神をもちひよそをぬきのけて
人をしりぞけまうをもし
海よりそのみちひとつはあり秘ごとをし
うまいかくれいあるくぬくそこのるるを
をあるのまいづるかぬきのかたにあるかい
ひをそそぬたりもひよそをねいつをく
ゆ人ものもをひくりまりをしれを
祇をのぬりひてるをのるを海神をぬきの
りのごくかくをれどぬるのをりと
いりそをじてぬいわづぬをるをかるう

ゐのありて海ハきれあんばしもいろりもん
ちゝぬやゝよりてゐ一海ちぬ一の紙のごと
をなるべ一こゝをこゝをていろよあゝろ一人
よるよゆゝとこゝれゆゝこのあゝさるごいちん
くちろ人ありさハめくゝうろれこゝ人なり

去の秋乃屋にいあやるしいめれ花

いろこそねやいくあく

あやるをちさるしいるしるでいるちろ

なりりやいく海とい梅のいくれぬだり香

のんいやなれば花のいろこそねもか

りひいくれるけばこの秋乃ひいるく

人りてわちるでなり人のげるるる

をみてあるるをちるはまにに海

の秋れひなりをいろふこそつけるね

恵をる人くれるさ物なり世のれ

ぬと人これるるばあるるんとはひてをど

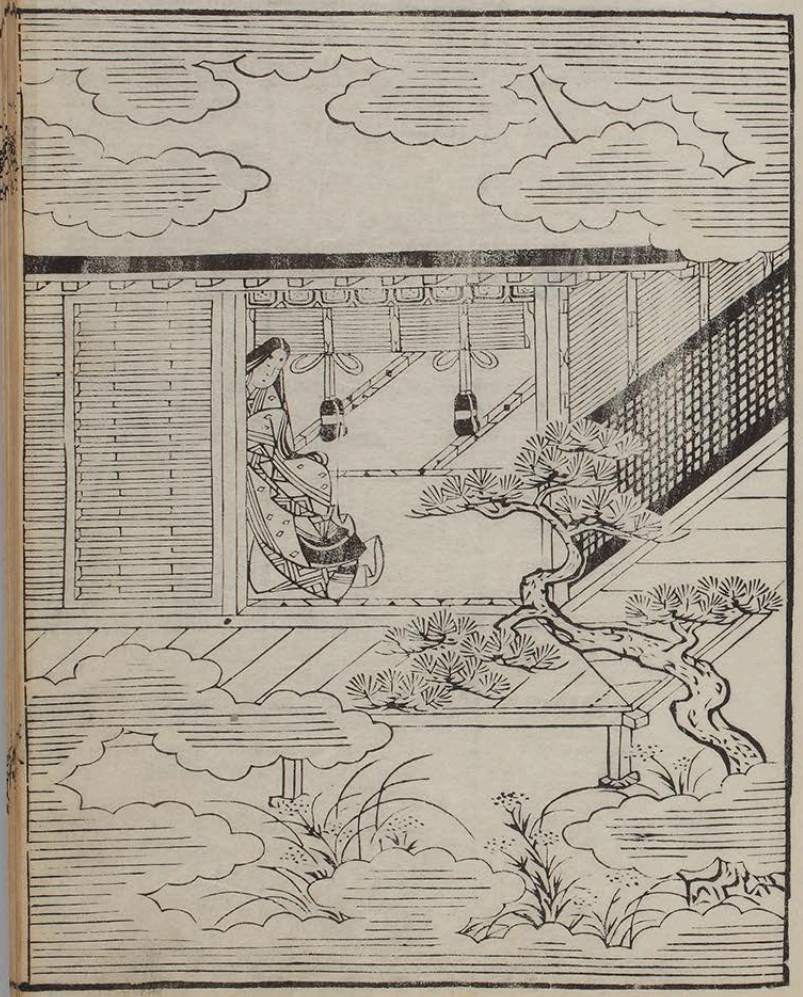
るのでかれるとはり人ど人これるりて

るめるいろをけなりおそれても

れを海べきるなりそもを下の今古

今集よるるる

人のうらやましがるべきものは
秋の夕べ
をとこしはいかにも女らしく
ろうつくしき女のようにもなりぬべきを
ろうべし秋ぐさの花をさかせ
あちらこちらいんぎんとうつくしく
やしいうきれいにて人よりあるを
をとこはまだるい女のようにあるべし秋ちかき
頃秋のこのちかきをいかにもいとをしくてまもる
つとそのやうにやうやう色づくあるべきさまに



それどもこの家にあるべしとさわぐ
小姫なり家ゐどもこぞいとぐ秋ぐりに
の　ちらくれん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪ふりて年のくれゆかんけよりそ
つるよりみちぬ松もそてしそれ
りみぢぬいりみちぬなり春よそまそれ
いそぐれりそそそぐれよりまぐれいれよ
そそそそそぐのよりみぢせぐろいなし
つるみもそぐれもそそぬりのい松なりと
それど春もく徒嘉ろうまでいりし又
いろりみるりやしそれりどり雪姫
ゆそそそそろそそゆりなりそそる成
あるくやそてあまぐそいぢあよを

みぢをぬれとそんしゆるぞしかりさいそ
なくてゆちぶをはくそんをのぶるぞ
ちゝはぎくこの松のごとくなるべし
しをちぐれりあつれとばるかれを
くまんかんをんちうりあふりゆく
ゝるべしきくんぐわざゆくこのいをこそ
ゆくゝをんかしてをくのうんをん
あんぜをちうしをそのいをとをくこのこと
ふをしるなくるぐいしやうをばだをを
をこれしるぐんくをいうちのうををうて

うるとるべしくゆくこをあふをどれうり
てをなれるぐちゝはのいうをとくどをそのあ
をきうりの人ありをつおをりりみぢぬれ
なりあるをどれ人をり

きのふこゝにひるまとりしてあるを月
なりれてゝやうさ月日なりうそう
きのふきふあるをとゝもうさゆく月日あるを
川と申す川のなごれのごとくやうさうち
うれども人やうるさ四月日紙なごくた
りあるうるゆゑよ物ぬるゆゑ世部
あるゝ人のひとめ九ちつ八川ちうそんり
ぬうさうちうひまで申くりの月日ぞや
世部して物うく後野ぞやうて他人中絶後京人よゆゑ
うち絶もづそうちゆびとうれちうそ

きさいをひめてゆきとよさこれどもあて
りてもそやんよ物をこうんをいれ
どそのよ成人して物ぞこんをを
きと紙をこぬまるれどるいびめで
い文もそゆしひとをいるこびめで
こかりこびその姫人よゆきそひとめ
りこるもそのめりこくかうこびれど
きこんこで一度のゆこんを縁きこぐ
わこかられ月日のこりゆくを此
こびこくこをこでゆりくこんりこ

こりきをれりこれば新のこりこあり
こりいこるこりこなりいをこあてり
をこりこびこるこびゆこんを
なりこび

あるとき孫乃丞やのまへにてあひを聞
ふくりいせうれとぐ丞そ
あるとき孫ねの丞やといひてもうるち孫や
ぐちりつひてをそれ丞やのまへなり此歌
いとのちゆうといふ人奥列といふとき
あ人ゆうとそのあひしらなりなり奇乃
ふい都ゆうり奥列やでい三百里りやうと
らんそのあひてさよいわ板の実信ぐせさ
あどいふ実ゆりくてあなどをいしやすく
と思うひとものゆうこふりとるさ

まくにあひそへやうにぐらうとは
せさとく先そとしてうまくこに新のゑ
ゆかいつをゆかとはなけまとまうれはなをこ
ていこうよんをこれくんを分みけそそ
ぬをりこれば人乃ひとをあ人してこち
ゆやとまうれぐうるしわうこにゆや
乃御んのとのまとあひそまゆひ奇乃
ごくこまていうもしてゆはんゆをを
このゆ分よ人しやとをゆまいうせこにや
ゆうべしこそいうあしこうへしゆこうゆ

ひとうれぐたちのすいあうべうこをゆぐ
弐ゆをゆとゆ分乃ぐやうぎうくして
こうこうこうこうあゆこうよあいこやうゆ
ひとこうせこいうせぐこうるうしびその御
ゆゆ分うこうゆうべしゆこうこうびいこゆ
巻四人すうし

かりこ義の名をしてそばらりけく
うゝひとゝものこゝ名乃なくら年
そばらつてゝあるまつなり奇ゆゝいとりが花
の本よあそびてその花乃名よあれてくこと
を知ゝそなくまりこれゝ花よあそべといい
ひ我ゝこと様のてあるまてる地とこしろられ
名のこよいはゞと人の様よるさ姿むもあさ
我ゝこりるをくこと人ゝいりんさこいかりもる
女ゝこゝゆゝこゝとゝくゝをつゝゆゝして様よる
くの割ゝりゝゆゝくゝゝよゝとゝゝゝ

うさぎのうへいもをれろ閑なれや
ふるさとの閑なれども海苔をもぎりてあるもうてさ
ありてよふうさぎもろ人いるこそしかり智
恵あるかくれめなりやいよいよまたそれよりんの庭
にかくれてもろ人をみてしらんとおいあ
わさくしもろこそしれもろこ女のちをとう
よあつて何をもんようもとんで
ぞそしらぬ
うれねをのいわど

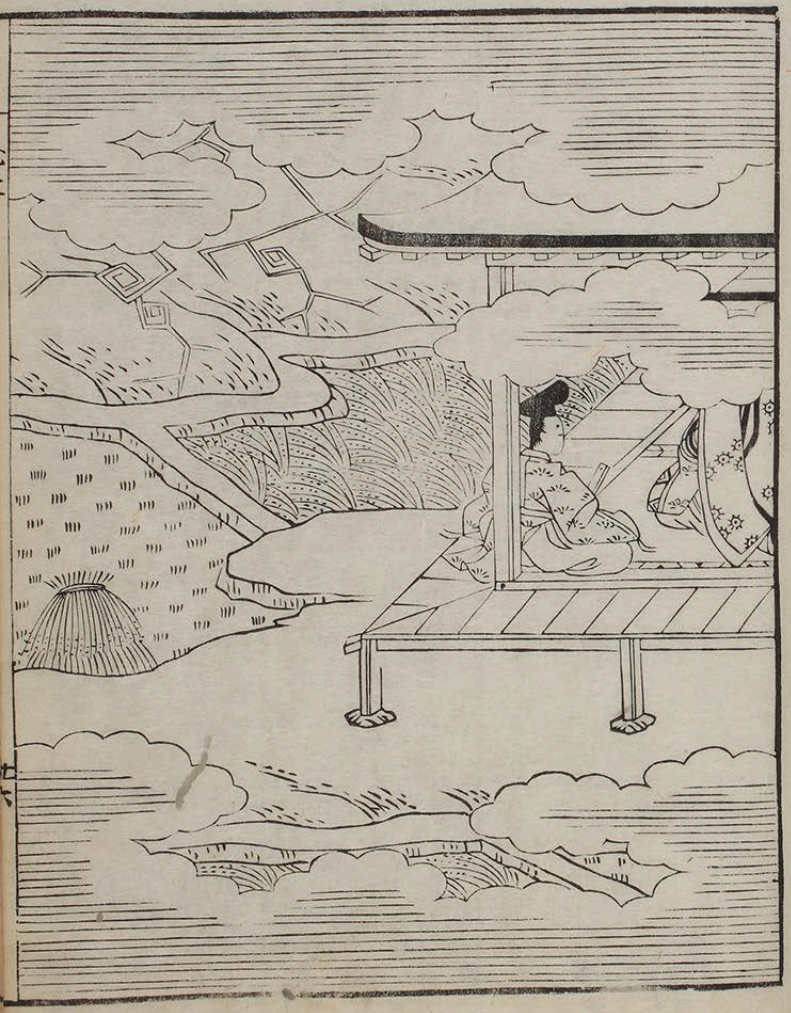
秋の田ゐのかりほのいほとまをあらみわが衣手は露にぬれつつ

あしびきの山どりのおのしだり尾のながながしよをひとりかもねむ

花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに

これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬもあふさかの関

わびぬれば今はたおなじなにはがたみをつくしてのちあふことかな

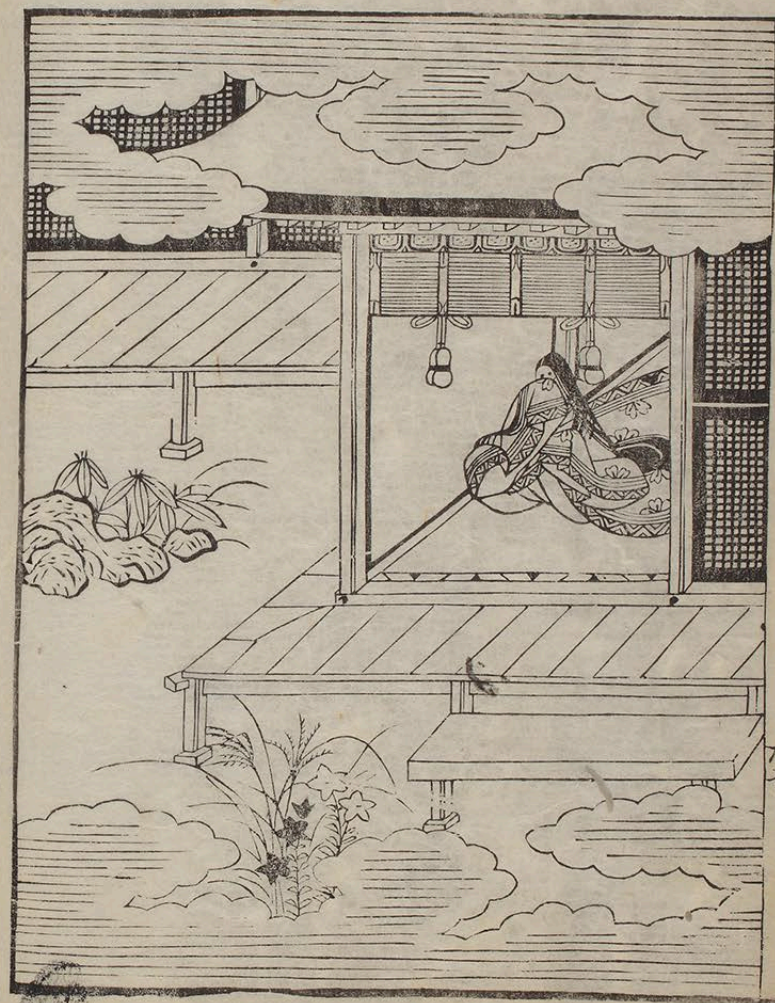


さてあるときあるぐしゐと屋うちあて見見しやとうちふるあるばめつつひのりのやうくもゝ常とゝとゝぐ東とい移どしてうづくあるひやとゝ爲ちるのまゝあるゝば家の門うびくまりり男れりうれめくいるぐうものなゝ行るようれと網人とくゝ入うさうのくばうひやれうゝとうれとゝいゝ始るうん

いはうの後なり世はうつりかはるを
しのびて神いまはうつりまし
歌のこゝろはいにしへ人と申してなくなれる人を
こゝろうつりはなくこゝろやとまりしかれども
よろづうつりてのちもつねなりをしこれろ
うつりのなごりをしばし人のこゝろをとゝ
まりてゆくしのびよ神をゝもはるまで
さうこゝろのまゝにうつりかはりなみを
なりもゆくうつりゆくことをなごしとなりて人
の人〳〵ゆくいそぐこの世のうつりまゝにあれ

こゝろのまゝ人〳〵あくがれをゝ
世をうとうとしよ巻物をとゝ歌そも人
うつりあくわんのうつりてまゝにいくを
しとゝまりひとゝびゆくひるごゝろをとゝ
こゝろのうつりのなごゝなを思べし

こゝろうつりのなごゝ



きりのもつてあそびてうつくしかりけ
りとりぬらんとて人いとをれん
ぞ一所のことをもまぬまゝ婦あるんよとゝ
やこの方ばかりいつくまてあるんとものめて
その年をとれなのこゝもとをれどもこゝろ
の偽るれば世いつくりよりてくりやはず
とるるるにりやまつ心れあるべせめく
泣んとまこのもりてそ一日づいつくりあを
ちりどいよまつくまりへりとりまて
とにかのちりり

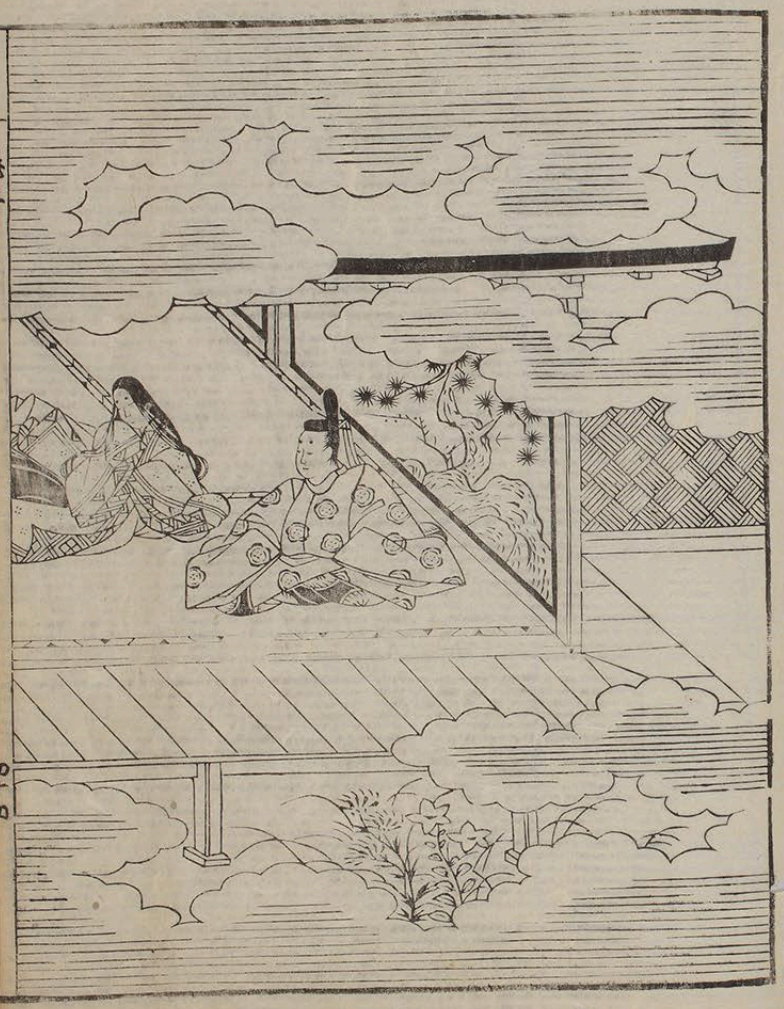
いつくしまのうらにいまさうにさうなることをうれいるものをんまうでゆきこと我と行んぼよいんどもまことにこあらじと思いつくりてゐるこころにのこりあるさまど我ゆきこいつくりいみじかりけりされ人のまことにてをうきのりと思えんゆきこいつくるれどこそ我と何ゆえぶこうまうでゆきこのいつくりをりゆこころやるふしるのむぐるをたりとこりまこに女のこころかり

吉野川うの人をつくりかへん
そやをいひてこんとそれば
うの川いうやとうをとわくそいとん
あなとをくいひてとあひそわとし
れいひとうのあくんば我ものこれな
つくさにれいをとうをとうばつ
してのれをくやうの人のそふく綴たびひ
乃れやづらあつ為て上八頭君より下ハ
ちうこさ僧侶よつの中くやちをとこめ
月日をとこびやこと女さうつをこ

ゑまゐせしより代々うるまぢ殿のもと人
くらゐ高き夫人とはなりたりしかど紙
やうのものとて紙よりつくりたるかぢをそ
ゑれもとすまとそろそろよりぶきや
人ぶりあまたれいもしらりしま
ゐたりしとなり

くてそうそうあくまれてそめけるこ
ゝろよこゝもとめゝるまゝや
ゝ我をしらいはゝこのうちよ我ゝをもむ
なりなるこのゝなりゝゝろいはゝこのゝれ
ゝゝゝうつなし　我のまゝ乃中とつふを
ゝゝこのをゝこゝうちよ因られてゝるあゝ
よいあゝゝゝ天地神明のえんをさゝめなゝ
てゝのゝゝこの家をゝさめんゝあよゝさゝ
なりゝゝあゝよゝゝこの霧をゝゝゝうゝ
ゝゝをゝれいは家の門ゝれやゝよゝゝむ

ゝゝ役なりゝゝゝゝりくなゝゝれんゝ
めよてゝゝゝゝゝゝゝてゝゝあいゝゝよ
うゝゝあゝんゝゝ我あゝゝくゝゝゝゝを
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

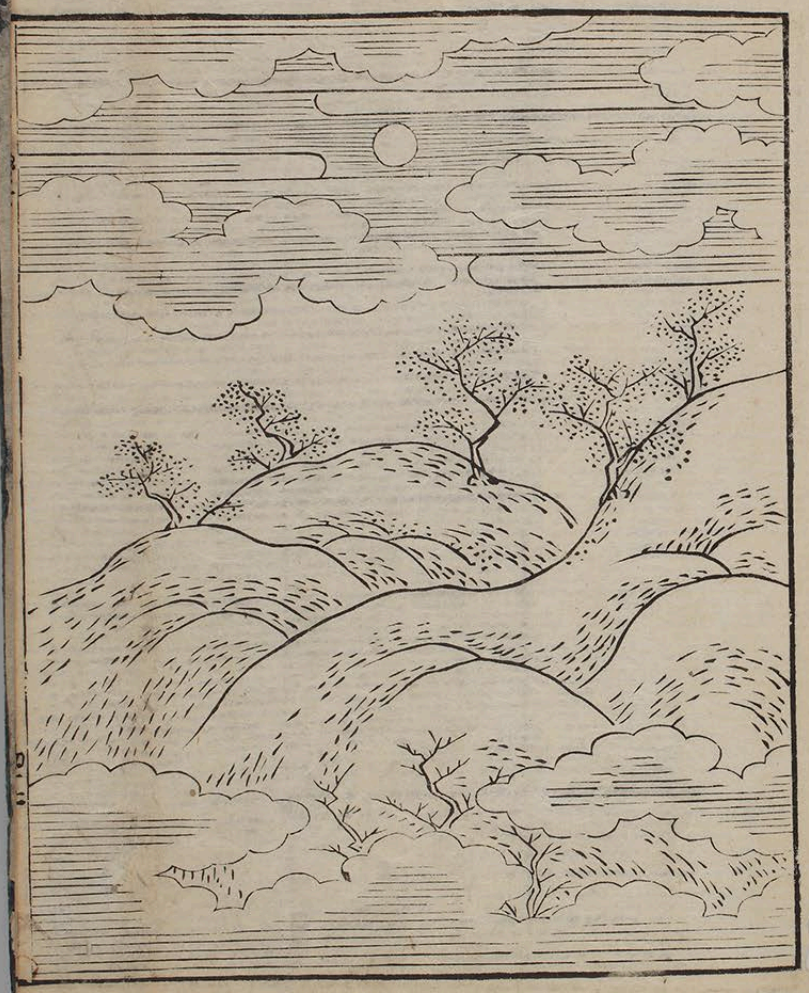


ことのかぎりなくのみちをとりてはかなくて
いろよみてくそめうたばかりうつしつ
そをもてあそぶ思ひ出でとこころで
人ゐんのりちぎうあるをゆゑよしなくの
ねたきものとうちうち

終てしかるべき物を世に乃
人のちぎりの縁ありを
毒のうれへ人を苦しうしてたちまち
命をうしなはんとすれども
いまだそのしるしをあらはさず
のちぎりの縁いかなるもの
うらをしるせばこれをみるものこれ
ふ東のまんうちにいたらんとす
はたち女一てびきこの用をなしてとて
ものをあらはすべしよるのこと

めをもちゐるべしこれをこころうるなら
されば世のこのいまよりさく花のやうに
みづからいとのあり様をしらんとて
うしぬ女ちりとても用ゐるべきなり
どもてもようるんちりの毒人智恵ある女
とうとうとみんいあやまりもちりなく
しむ色

おもひなさこ谷の水はまをこそなれい
ゆくへくちぬ物ゆりしりぬし
年のふるさとみのそこ人いまの日はおもて
なりもゆりもゆくへ絲い美さまを
なさなり日のあるそこ人いまよ
美さけどもそれいよりも式ゆきよ物れ
りふなりもそれで美とそこ所もそこぬ
ふなりげゆきそこるりぬそこ人でつゆ式
あゆきりるゆこ家よ入てりそこりや
そつゆもあ見はさよりこであゆまれ



なるもあるひんさに入らぬつまを乳より入る毒
つまをうやむべきよねをやこれんを長ぐ
まじきれどもとげどもて地ゆりひとんちち
ハ姫ちちうまをてりてうやうれぬげまし
かり岩をいりてうやうれぬ方よりかくれ
えをびやこのりてうやしにうこ嗜毛をうて
もやうく女の栄花よりうくらうをびり
すくをうれくをらびくよりかくうる
べしくあうさ級かりうやづひをびて
まひらうをべし

身をもてくゆるやうによろんぢやうの
おなじこころのいきほひなりけり
人のくいゆりしのみるるはなりけり紙ぬぎ
死人もくいゆくなりこれを身をもてくゆり
ふなりあるべきその身いきほひ
ちからあの行ぎ人よろぶぐ月花とこと
ゆりくいをやく月花のりくゆり
てあるごとくされば世の人をもとむ
まやうよあくるつ移よるものつるを
ゆるるべきはなりてありつるとゆる

をもてくゆれまりてゆをとりくるつる
よ紙ありさて身よくるるけまばいをぐふ
まをもるるみよくばてあやまちを
あるなりさるゆくよくくいのはまの
つるをゆるさで生るよ身をもてくゆるぬやくよ
をくるくりくて花落まくくの姫つる
よくの身をもてくゆるまるるくくの
おくすくくくはをあるくくも生
つるをくくくくくのくくくゆるぬやくよ
をくるくくあなり

風吹きぬきて川をこぎ渡りて山
ゆきしあや君り知やりこ香しん
左京業平 河内の国よりこれる女ありてやま
との國にかよひしるになりぬるのつきをて
を祈るむんなくなりぬるの母ものやうよら
ん人ていとくいてやりそれはあまりふ
祈さむんなさいりてみまそれんあるまや
とりぬるこうむしてある程河内へり
そそれをそんそれいつまきくうし祈
ぬるさるいなくてなりしのの程さむしと

きりてさんをかりやめしたくらんこうかい
みしといへども氏出うさのべくこうるげき
ていねあるとなりのこゝをそうよくてあ
れどりこそれまりうらつをうるさんに
ゆをぬをきれしくなり世よあまわく
ちりこうるゆなんばうらくうさつこうるよを
まつぐて

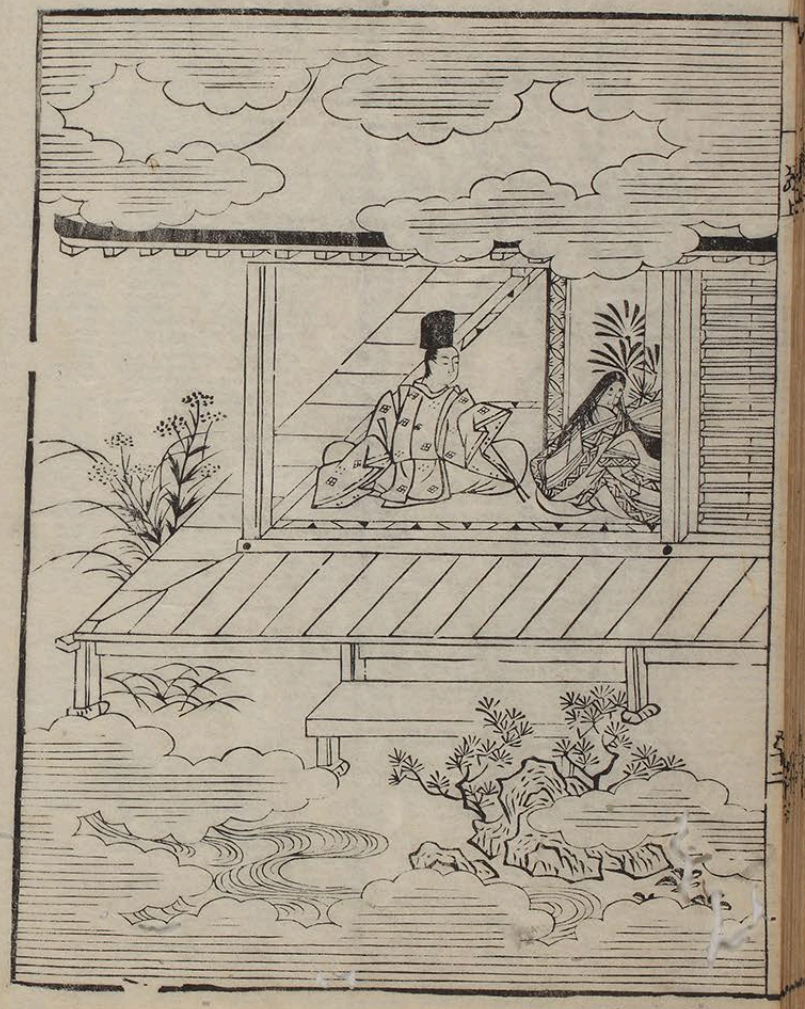
れとはなしに人とはなるぬしらは
我はなしに人のれとはなりそめ
あくがれと思ひなやをられつく思
ひそまつぎれそのしくひて我はなふ
ぐれとさそそぐまつる恋し我し
こるのうあしよつそそのしくひのれる
きるへ農人の業をまけいろをうしをまけ
しひざとうはまつれそうぐうぐ我をふぐ
人を思うて我い人はそれんをうはまぐ
ひき業をうんとまつし仏恋あるぐうしぐ

[illegible]

秋のゆふべ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

64160